

令和 4 年度 一般入学試験

国語総合

(9 時 0 0 分 ～ 9 時 5 0 分)

(受験上の注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 受験票は、机の右上に置きなさい。
- 3 「始め」の合図があったら、まず、問題用紙及び解答用紙に受験番号と氏名を記入しなさい。
- 4 問題用紙を留めているクリップを外しても構いません。試験時間中、外したクリップは受験票に付けておくこと。
- 5 答えは解答用紙の解答欄に記入しなさい。解答欄及び受験番号・氏名記入欄以外には何も記入しないこと。
- 6 印刷が不鮮明なときは、だまって手を挙げなさい。なお、問題の内容や答案作成上の質問には答えられません。
- 7 「やめ」の合図があったら、すぐに筆記用具を置いて、解答用紙を裏返しにしなさい。問題用紙は表紙を一番上にして重ね、クリップで留めること。
- 8 原則、途中退出はできません。体調不良等により退室しなければならない場合は、だまって手を挙げ、試験監督の指示に従ってください。
- 9 試験終了後は、試験監督の指示に従って退席してください。

宮崎県立農業大学校

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

問題として採用した文章については著作権者への配慮から、掲載を差し控えています。

（郡司ペギオ幸夫「天然知能」による）

問一 二重傍線部①と②のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めなさい。

問二 波線部α、βの文脈上の意味として、最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

α 覚束ない				β 融通無碍			
ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ
やる気がない	適当ではない	確かではない	感覚がない	何にもとられず自由な様子	決められた形式どおりの様子	これまでの中で最もよい状態	取り留めなく根拠のない状態

問三 傍線部①「視界が境界づけられる」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 孤独で誰からも理解されないこと。
イ 世界が一つに意味づけられること。
ウ 偏ったものの見方でとらえること。
エ 目の前のものしか認識しないこと。

問四 傍線部②「白地図」とは、どのようなものか、本文中から十字で抜き出して書きなさい。

問五 傍線部③『ほぼ部屋の壁に沿って廊下が配置されているようだ』、という判断はできた」とあるが、「人工知能」の場合、どのように判断したと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 視界に入った部屋の壁と廊下の情報を個別に論理的に分析し、異なるデータ同士の関係が正確かどうかを高速で計算して、位置関係を割り出した。
イ 視界に入った部屋の壁と廊下の情報をデータとして完全に入手し、他の既知データと関係づける計算を速く正確に行って、位置関係を割り出した。
ウ 視界に入った部屋の壁と廊下の情報を全体像に基づいてつなぎ合わせ、部屋を出て廊下を歩いたルートマップと照合して、位置関係を割り出した。
エ 視界に入った部屋の壁と廊下の情報を空間的な糊代として設定し、限定されて独立した情報と情報を糊付けして固定して、位置関係を割り出した。

問六 傍線部④「一・五人称的知性」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一・五人称とは「あなた」自身にはなりきれない「わたし」のことであり、想定外の何者かである「あなた」の存在を許容しつつ主体は保持する態度のこと。
イ 一・五人称とは「あなた」と向き合っている「わたし」のことであり、「あなた」が知覚されなくてもその存在を想定して受け容れつつ待ち構える態度のこと。
ウ 一・五人称とは「あなた」を知覚する主体としての「わたし」のことであり、知覚されたものと「わたし」を関係づけてその都度対処しようとする態度のこと。
エ 一・五人称とは「わたし」と「あなた」の間にある「わたしたち」のことであり、「あなた」に対面することで「わたし」の存在を立ち上げようとする態度のこと。

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は、「わたし」が生きていくための世界を、情報が十分存在する状態に向けて絶え間なく修正し、拡張しようとする努力する知性を評価している。
イ 筆者は、「わたし」や「あなた」が生きる世界を、唯一の正解は存在しないと判定し、すべての可能性が考えられた状態を目指す知性を評価している。
ウ 筆者は、「わたし」が生きる世界を、「わたし」以外のまだ見ぬ存在に対しても解放し、当初の目的とは異なる展開をも楽しむ知性を評価している。
エ 筆者は、「わたし」が生きていくための世界を、一度バラバラの断片にして知覚し、再度世界全体として別の角度から構築する知性を評価している。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

問題として採用した文章については著作権者への配慮から、掲載を差し控えています。

（注） （西條奈加「銀杏手ならい」による 出題のために一部を省略した箇所がある）
1 型彫師……着物の柄を染めるための型紙をこしらえる職人。

2 露水……江戸にある大きな私塾「志水館」の跡取りで、萌とは師匠仲間。互いの父同士も親交がある。

3 椎葉哲二……江戸の手習所「椎塾」の師匠で、萌とは師匠仲間。大らかで型破りだが、生徒の個性をよく観察して指導する人物。露水とは「昌平しやうへい塾」で共に学問を学んだ。昌平しやうへい塾に来る前は、歳の近い者たちからのやつかみをうけていた。

4 お喜多……五十蔵の妻。

問一 波線部 α 、 β の文脈上の意味として、最も適当なものを、次のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

α	見るに忍びなかった			
	ア	イ	ウ	エ
	気の毒で耐えられなかった	恥ずかしくて直視できなかった	ひどい状態を隠せなかった	悪くて申し訳なかった
β	焼きがまわった			
	ア	イ	ウ	エ
	老いて腕前が落ちた	老いて鋭さが衰えた	老いて意欲がなくなった	老いて気が引き締まった

問二 (A)、(B)に当てはまる言葉の組み合わせとして、最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア	(A 事	B やんわりと	イ	(A 足	B じつくりと
ウ	(A 事	B ばつちりと	エ	(A 足	B きつぱりと

問三 傍線部①「きゅつと唇を噛みしめて、膝に置かれた両手で小さな拳を握る。」とあるが、このときの信平の様子を説明した次の文章の()に入る適当な言葉を書きなさい。ただし、(I)は本文中から指定された文字数で抜き出し、(II)は後のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

親方のもとへ弟子入りしたいが、一方で、(I 三十一文字) と思い、(II) をこらえている様子。

ア	怒り	イ	悔しさ	ウ	笑い	エ	痛み
---	----	---	-----	---	----	---	----

問四 []の部分から読み取れる萌の思いを説明したものととして、**適当でないもの**を、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 十歳の子どもに家計を背負わせてせっかくの学びを止めさせてはいけない。
イ 弟子を取る夫婦の不安に考慮して銀杏堂が責任を負うことで安心させたい。
ウ 子供ながらに考えた決断を尊重してどんな結果になろうとも応援している。
エ 修業を終えて一人前になった後も信平は約束を守る人物だと信頼している。

問五 傍線部②「もちろん駄賃は払う。玉子売りと同じくらいには、なると思うぞ」とあるが、五十蔵がこのように発言した意図を説明した次の文章の()に入る適当な言葉を、本文中から指定された文字数で抜き出して書きなさい。

職人の道理に背くため(I 七文字) としての給金は払えないが、(II 四文字) に対する駄賃という形で収入を確保させ、信平が修業できる環境を整える意図。

問六 傍線部③「おめえも手習いは、まだ半ばなんだろう？ おれと一緒に、通ってみねえか？」とあるが、このときの五十蔵の思いを説明したものととして、最も適当なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えよ。

- ア 自分の苦い過去に向き合い、弟子と共に学ぶ関係も作って修業を長続きさせることで、自分の技を継いで欲しい。
イ 弟子は子と同じと認め、父親と実の子のように若い弟子に接することで、家を出て行った倅が戻ってきて欲しい。
ウ 働き詰めの人歳の自分を回顧し、あえて逆のことをすることで、手習いの暇も与えなかった師匠を見返したい。
エ 修業に消極的な姿勢を嫌い、中途半端を指摘することで、若いときの苦労は進んでやった方がいいことを伝えたい。

問七 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～④の説明に合致することわざを、後の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① むだ話をして時間を空費すること。
② 弱者に同情すること。
③ 名人でもときには失敗することがあること。
④ よくない所行をやめること。

ア	目をつぶる	イ	竹馬の友	ウ	弘法にも筆の誤り
エ	足を洗う	オ	判官びいき	カ	待てば海路の日和あり
キ	油を売る	ク	泣き面に蜂		

問二 次の文の()に漢字を入れ、文脈に合うように四字熟語を完成させなさい。

- ① 孟母（ ）（ ）の教え。
- ② （ ）骨（ ）身仕事に打ち込む。
- ③ 清（ ）（ ）白な人物。
- ④ （ ）洋折（ ）の料理が出される。

問三

次の①～④の文で用いられている修辞法を、後の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 光陰矢のごとし
- ② 国破れて山河在り 城春にして草木深し
- ③ 夕日が背中を押してくる
- ④ 急がば回れ

ア	直喩（明喩）法	イ	隱喩（暗喩）法	ウ	換喩	エ	擬人法	オ	倒置法
カ	逆説法	キ	対句法	ク	反語法				